

山専用ボトル、発売から10年!

今なお愛される 山の大定番

登山での使い勝手に徹底的にこだわった
サーモス「FFX-900」「FFX-500」、通称「山専ボトル」。
高い機能性と保温力は、
登山者の声を生かし、生まれたものだった。

須藤ナオミ＝文 中村英史、萩原浩司＝写真
山と溪谷 2017年10月号掲載

温め直さずそのまま注ぐだけ!
それは革新的でびっくりだった

今秋で発売から10年を迎える「山専
ボトル」。登山者視点の意見を聞かせ
てほしいと、開発当初からアドバイス
を送っていたひとりが「ROCK &
SNOW」の前編集長、萩原浩司だ。

「要望したのは、まず保温力でした。
従来のボトルは、朝、湯を入れても、
休憩時にバーナーで温め直すのが常で
した。山専ボトルにより、その必要が
なくなったことは大きいですね。昼に
飲もうとしたら熱すぎて飲めなかった、
という笑い話があるほどです」

これは手間を省くだけでなく、目帰
りならバーナー類を省略でき、軽量化
にもつながる革新的でよかった。

「容量についても、2人で山に登った
ときにカップ麺2つと飲み物2杯を作
れる容量が欲しいという提案をしまし
た。ファーストモデルは0・8ℓと少
し量が足りなかったのですが、多くの
登山者からも要望があったようで、現
行モデルは0・9ℓに増えました。ま
た、コップも大きくなり、コーヒーを
ゆつくり楽しめるようになりました」
高い保温力に加えて、登山者のリア
ルな声を反映した使い勝手のよさが、
不動の人気を保ち続ける理由だろう。

登山者に支持される3つのポイント



雪山では、温かい飲み物でホッとひと息つくことが、パフォーマンスの向上につながる

1 厳冬期にも耐える 圧倒的な保温力

絶大な信頼が寄せられる要因はなんといっても保温力。その保温力は試作品の段階から絶対的だったという。規定量の熱湯をボトルに入れておけば、6時間経過後でも0.9ℓは80℃以上、0.5ℓは77℃以上をキープする。



3 つかみやすさと 安定性にこだわったコップ

特徴的なコップ下部の膨らみは、テント内など不安定な場所でも倒れにくく、持ちやすい形状。手になじみやすく、ボトルをザックの中から引っ張り出す、回し開けるといった動きも考慮している。素手でもグローブを着用していても、ストレスを感じさせない。



2 最高レベルの軽さと 耐久性のバランスを追求

厳しい環境にも耐え得る堅牢性を保ちながらも、軽量化を実現。ボトル本体を形づくっている内筒と外筒の厚みと真空層をどちらも限界まで薄くしている。現行モデル (FFX-500) では技術革新により各部品で改良が施され、前モデルから40gの軽量化も達成。



ラインナップ

FFX-500

5500円+税/容量=0.5ℓ 保温効力=77℃以上 (6時間)、50℃以上 (24時間) 保冷効力=10℃以下 (6時間) サイズ=φ約7×23.5cm 重量=280g/260g (シリコンなし)



FFX-500

FFX-900

FFX-900

6500円+税/容量=0.9ℓ 保温効力=80℃以上 (6時間)、60℃以上 (24時間) 保冷効力=9℃以下 (6時間) サイズ=φ約8×30cm 重量=390g/360g (シリコンなし)



バーガンディー



ブラック



ライムグリーン

ダブルスクリュースェン

注ぎ口に受け部分を持つダブルスクリュースェンは、回しやすく注ぎやすいシンプルな構造。冬季にグローブを着用したままでも使用できるよう、前モデルより開閉がさらにスムーズになった

シリコン製のボディリング

グリップ性の高いリングは、滑り止めと衝撃軽減のため。取り外しができ、さらなる軽量化も可能。また、自分のボトルを識別できるよう別売でカラーバリエーションを展開している

底面を守るカバー

ボトルの大敵は、大きなヘコみ。真空不良になると保温力が損なわれるので、落下などでダメージを受けやすい底部にはカバーを装着。ボディリングと同様、取り外しが可能になっている

工夫満載の機能

容量にもこだわったコップ

前モデルより容量が約2割増え、コーヒーやティーバッグのお茶をちょうど1杯分入れられる。2色成型で内側部分を明るめの色にし、注いでいる際に湯量が見えるように工夫されている

保温力を優先した注ぎ口

注ぎ口は小さいほど熱が逃げず、高温を長時間保つことができる。しかし、径が小さすぎるとはボトル内部を洗浄しにくい。そこで使い勝手も考慮した小さめの口径36mmを採用している

収納しやすいボディ

径が太すぎるとザックから取り出しにくく、細すぎれば高さがでて収まりが悪い。ボトル本体の径と長さは、ザックに収まりやすいかという点も重要視し、計算し尽くされた形状だ